

## 「人まかせ」では改革は進まない

上廣哲治

七月に行われた参議院選挙の投票率は、四八・八〇%と二十四年ぶりに五割を切り、戦後二番目に低い数字を記録しました。なかでも十代は三一%台だったといいますが、投票率の低さには慣れっこになつてゐる人たちでも、さすがに「民主主義の危機」を感じた人が多かつたのではないのでしょうか。

選挙権は今でこそ、十八歳になれば男女とも平等に手にすることができますが、昔はごく限られた人にしか与えられていませんでした。日本ではじめて国政選挙が行われたのは明治二十三（一八九〇）年。そのときに選挙権を持っていたのは、二十五歳以上の男性で、しかも高額の国税を納めている者に限られていました。それは、全人口のわずか一・一四%にすぎませんでした。

その後、普通選挙を求める人びとの情熱と努力によつて、選挙制度は少しずつ改正されていきました。しかし、女性は長らく選挙権を持つことができず、すべての男女が参政権を持てるようになったのは戦後、昭和二十（一九四五）年の十二月になってからです。それは先人たちの血のにじむような闘いと、戦争という大きな犠牲のうえに、国民がやっと手にした権利でした。そのことを思えば、今回の選

挙で有権者の半数以上がこの貴重な権利を放棄したことは、簡単に見過ごすことのできない事態です。

投票率の低さの原因には、政治問題に対するマスコミの姿勢や、学校教育のあり方など、さまざまな要素があると思います。しかし、ここで問題にしたいのは、棄権という行動の根っこにあるもの、すなわち政治に対する無関心、あきらめ、あるいは「人まかせ」の意識などです。

じつはこの「人まかせ」の依存意識は、今に始まつたことではありません。福沢諭吉も明治初期の『学問のすゝめ』のなかでつとに指摘している問題です。

『学問のすゝめ』が書かれた頃は、明治政府によつて次々に学校が建てられ、工業が興され、軍隊の制度も一新されていきました。つまり、「文明の形」はほほできつつあつたのです。しかし福沢は、国の文明をそのような「形」によつて評価すべきではないと考えました。本当に大切なのは「形」ではなく、目に見えない「文明の精神」だということです。

では、「文明の精神」とは何でしょう。福沢によれば、それは「人民独立の気力」、すなわち人びとが自分で自分の身を律し、「他に依りすぎる心」をなくすことを意味します。ところが周りを見ると、「形」としての文明は整いつつあるのに、人びとの「精神」のほうはいっこうに育たず、何かに依存する意識も変わつていない。本来、学校や鉄道ができれば、人民は一国の文明のしるしとして自らこれを誇るべきなのに、むしろ政府の「おかげ」ととらえ、依頼心を強めてしまつてゐるというのです。福沢はそのような状況に対して、「人民に独立の気力がなければ、文明の形だけをつくつたところで無用の長物となるばかりか、かえつて国民の心を萎縮させる道具になつてしまふ」と警告しています。

福沢はまた、国家をひとつの会社にたとえ、国民には「主人」と「客」の両方の役割があると説きま

す。例えば百人の人間が集まって会社をつくり、皆で相談のうえ会社の法を決め、これを実施するといふ点から見れば、百人のメンバーは会社の「主人」ということになります。一方、決められた会社の法に皆が従うという点から見れば、百人は会社の「客」にもあたります。このように、人は一人で「主人」と「客」の二つの役割を務めなければならないといふのです。

しかし、二つの役割のうち「客」の意識だけが強くなると、他人に対する依存度が高まり、無責任の体質が現れてきます。今回の参議院選挙でも、自分が「主人」であることを忘れ、「客」として高みの見物をしていた人が多かったのでしょう。同様の状況は明治の時代にもあったようで、福沢はおおむね次のように述べています。

——国の政治を運営しているのは政府で、その支配を受けるのは人民だが、これはただ便宜的にそれぞれの持ち場を分けているにすぎない。一国の全体にかかわるようなことになれば、人民の職分として、国のことを政府のみに任せ、脇からこれを見物しているだけというのでは、道理が通らない。

つまり、「客」であるだけではなく、時には「主人」となって考え、行動しなければならぬといふのです。それこそが、「独立の気力」の發揮にほかなりません。

「お客さま」意識や「他人まかせ」の意識は、政治の世界にかぎらず、さまざまな局面で見ることができます。職場でも、言われたことはやるけれど、それ以上のことはやろうとしない人がいますし、自分がやらなくても誰かがやってくれると思っている人がいます。懸命に仕事をしている人のかたわらで、「われ関せず」を決め込んでいる人もいます。私は、わが会においても、このような意識や姿勢を克服していかなければならないと考えています。とりわけ「他人まかせ」の依存意識や「指示待ち」

の姿勢は、会の「改革」にとって大きな躓<sup>つまず</sup>きの石になりかねないからです。

今年に入ってわが会は、これまでの「改革」をさらに大きく推進するため、いくつかのハード面での改善を図ってきました。いずれも、会友の皆さんがより実践しやすい環境を整えるためです。しかし、先ほどの福沢論吉の指摘を援用すれば、いくら「形」を変えても、皆さんの「改革の精神」がともなわなければ、その「形」は無用の長物になりかねないのです。

最新のコンピュータを手に入れても、それを活用するソフトがなければ、ただの金属のかたまりにすぎません。それと同じように、私たちの改革に必要なのは、ハードとソフトがしっかり連動<sup>リンク</sup>していることです。ハード面の改革は、会の運営責任者である私におまかせください。何かよいアドバイスがあれば、遠慮なくご意見を述べてください。一層の改善に努めましょう。しかし、もっとも大切なのはソフト面です。そしてそれは、皆さん一人ひとりの意識と実践の改革に委<sup>ゆた</sup>ねるほかありません。

倫理の実践とは、誰かに命じられたり指示されて取りかかるものではありません。自らが自分自身のために、当事者意識をもって主体的に行っていくものです。実践においては、まさに実践者自身が「主人」でなければなりません。福沢論吉のいう「独立の気力」が必要とされるのです。そして、その気力は、会の改革にも大いに求められます。なぜなら、改革は他人<sup>ひと</sup>事ではなく、ほかならぬ皆さん自身がより善い実践を行うための道づくりなのですから。

リーダーの指示を待つだけでなく、時には自らが進んでリーダーの役割をはたしていく。すなわち、「随所に主となる」覚悟を持って、ともに改革を明るく元気に、そして笑顔で、力強く推し進めていこうではありませんか。